

# 特別栽培米「奥出雲千石米 コシヒカリ」栽培ごよみ

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																			
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25															
生育段階・区分	育苗					活着					有効分げつ					無効分げつ					幼穂形成					穂ばらみ					登熟														
生育段階・区分	播種					田植え					有効分げつ決定期					穂首分化期					最高分げつ期					穎花分化期					減数分裂期					出穂期					成熟期				
水管理																																													
技術内容	<p>◎健康な苗づくりを！</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>堆肥施用 深耕 稲わら腐熟</li> <li>できるだけ外気温にならして健苗育成</li> <li>硬化期は温度管理に注意しながら</li> <li>薄まきの励行（乾籾100〜120g/箱）</li> </ul> <p>◎元肥は控えめに！</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>有機物多用田では減肥</li> </ul> <p>◎植え付けは適正に！</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>体系処理による効果的除草</li> <li>いもち・虫予防に箱施薬</li> <li>植付け株間は23cm程度</li> <li>一株植付け本数 三〜四本</li> </ul> <p>◎水管理の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中干し（一株二〇本になった時）</li> <li>作溝の実施</li> </ul> <p>◎穂肥は適期に適量を！</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>有機質肥料のため</li> <li>（出穂前二五日・幼穂長約〇・五mm）</li> </ul> <p>葉色・茎数をみて生育に応じた施用を！</p> <p>◎仕上げは万全に！</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>稲わら腐熟促進</li> <li>網目一・九〇使用</li> <li>水分一四・〇〜一五・〇%</li> <li>適正な乾燥へ急激な乾燥は避けゆつくりと</li> <li>青味籾率一〇〜一五%</li> <li>適期刈り取り</li> <li>適期落水</li> <li>出穂後三〇日程度は間断かん水</li> <li>カメムシ防除</li> <li>穂いもち防除・カメムシ防除</li> </ul>																																												

## ◆栽培での注意事項

栽培目標	多収を第一とせず、粒張りの良い玄米生産を心がけ、バランスのとれた収量構成要素の実現及び登熟向上を図る。
土づくり	粗大有機物は完熟堆肥を1.0t程度施用する。（但し、集積状況、土壌診断結果に基づいて決定する。深耕は18cmを目安とする。）品質低下を防ぐため土づくり資材の使用。
施肥	肥料は極力有機質肥料を使用。施肥量は化学肥料窒素成分量で10a当り2.75kg以下とする。（コシヒカリ）
育苗・田植	薄播き（乾籾100〜120g）健苗育成に努め、1株3〜4本植とする。
水管理	水管理を通じて生育調節、根の健全化、地力窒素の活用等の効果を高める。
病害虫防除	調和のとれた土づくり、健苗育成等の耕種改善による健康な稲体作りを基本とし、防除は畦畔の草刈り等耕種防除をまず実施する。農薬を使用する場合は、防除剤、種子消毒剤を含めJAしまね雲南地区本部が指定した薬剤を使用する。なお、指定農薬以外の薬剤防除が必要な状況が生じた場合は、関係者が協議し、その結果基準値を上回る追加防除を行った圃場の米は慣行栽培扱いとする。

## ◆施肥設計(10a当り)

### 粒状肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	元肥	追肥	穂肥	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
堆肥	(※)1000						
雲南専用土づくり肥料	60				1.5	1.8	2.2
優作	30			3.0 [1.47]	3.0	3.0	
ホスピタ		(※)20			(1.0)		(2.3)
けい加里プレミア34		(※)20				4.0	0.8
優作			20	2.0 [0.98]	2.0	2.0	
合計				5.0 [2.45]	6.5~7.5	10.8	3.0~5.3

### 一発肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	元肥	追肥	成分量(kg)			
			窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量					
堆肥	(※)1000					
雲南専用土づくり肥料	60			1.5	1.8	2.2
ホスピタ	40			2.0		4.6
けい酸加里プレミア34	40				8.0	1.6
すご稲有機355	40		5.2 [2.548]	2.0	2.0	
合計			5.2 [2.548]	5.5	11.8	8.4

### ペースト肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	元肥	追肥	穂肥	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
堆肥	(※)1000						
雲南専用土づくり肥料	60				1.5	1.8	2.2
有機50ニューフレーザー10	30			3.0 [1.5]	1.2	0.9	
ホスピタ		(※)20			(1.0)		(2.3)
けい酸加里プレミア34		(※)20				4.0	0.8
優作			20	2.0 [0.96]	2.0	2.0	
合計				5.0 [2.48]	4.7~5.7	8.7	3.0~5.3

## ◆農薬使用基準(成分回数8回以内)

注1)〇内の数字は成分回数を表します。  
注2)農薬使用基準を正しく守りましょう。

種子消毒剤	特別栽培米の種籾は、無消毒種子を用い、温湯種子消毒を行なう		
育苗箱施薬	スタウトダントツ箱粒剤②		
除草剤 (体系1・2のどちらかを選択)	体系1	初期	ピラクロンフロアブル①又は、ピラクロン1キロ粒剤①
		初中期	ゼータワンジャンボ①又は、ゼータワン1キロ粒剤①
	体系2	中後期	アトリー1キロ粒剤①又は、アトリーつぶ①
		初中期	ビクトリーZジャンボ②又は、ビクトリーZ1キロ粒剤②
本田防除	【出穂前】 いもち病・紋枯病・カメムシ類 アミスタートレボンSE② トレボン粉剤DL① } どちらか1回選択		
	【出穂後】 カメムシ・ウンカ類 スタークル液剤10①又は、スタークル粉剤DL①		

(※)堆肥の施肥量は、土づくりの集積状況や土壌診断に基づいて決定する。  
(※)窒素肥料の施肥量は、土壌診断及び稲の生育状況により散布量を減らす。  
(※)粒状・ペースト肥料体系のホスピタは、初期生育が悪い場合、茎数を確保するため、田植20日後までを目処に追加施用する。  
(※)粒状・ペースト肥料体系のけい酸加里は、田植後30日〜35日に施用する。